
リメディアル教育の実践

—ポートフォリオ学習の有効性—

佐 藤 敏 子

1. はじめに

(1) 学力低下の問題

中学校学習指導要領が1993年、2002年に改訂・実施され、とくに2002年度から実施の「ゆとり教育」に対しては、「学力低下問題の原因」であるという論調^①が多いが、大阪教育大学「学生の学力低下に関する調査」(教員対象)(1999年3月)には興味深い結果が載せられている。

「学生の学力低下が目立つようになったのはいつ頃ですか。」

1. 1997年以降	24%
2. 1990年以降	26%
3. 1979年以降	13%
4. その他	7%
5. 無記入	30%

この調査では学力低下は1990年度以降すでに意識されている。「学力低下」の原因が何であるかという答えを出すのは簡単ではないが、2002年の文部科学省の調査^②では、2001年の日本の大学進学率は49.3%であり、そのことはトロウモデルによると^③日本の大学がマス段階を越え、ユニバーサル段階に入る寸前であることを示している。Trow (1976) はそのことにより、「学生や教員の大学教育観、高等教育制度がはたす社会的機能、カリキュラム、学生の一般的な就学形態、学生の質、教育研究の水準と性格、学校の規模、授業形態、学生と教師の関係、高等教育制度と他の諸制度との境界、管理運営の形態、学生と教師の選抜の方法など」に関する変化が生じ、大学は変化に対応するための改革が必要であると主張する。特に移行時期の考察の重要性を述べ、現在の日本の大学が抱える問題点「カリキュラム改革よりも先に学生の社会的属性が変化」「ユニバーサル高等教育への移行は、多くの学生に就学を次第に義務と感じさせ、不本意就学を生み」という問題点がここですでに指摘されている。大学は従来のエリート段階の大学とは異なった役割を求められ、ユニバーサル段階に入る移行期の今、学習者が大学入学時に学習のモチベーションを持っているという従来の前提は成立せず、指導者自身が教材や指導法の工夫をしながら学習の動機づけをしなくてはならない段階に入っている。「学力低下」の問題もこのトロウモデルで考えれば、エリート段階・マス段階・ユニバーサル段階の変化で、当然起こりうる変化であると考えられる。

(2) 補習授業の実状

現在日本の多くの大学では「学力低下」の問題と取り組むため、入学した学生に対して「補習授業」を実施し始めている。文部科学省の調査（2004年3月23日「大学における教育内容等の改革状況について」）では以下のような内容が発表されている。

「高等学校での履修の多様化に伴い、補習授業の実施など高等学校の履修状況に配慮した取組を行う大学も年々増加しており、2002年においては、国公私立404大学（約59%）、790学部（約46%）が実施している。」

しかし、1994年から97年にかけては補習実施校が順調に増えているわけではない（1994年61校・95年45校・97年78校）。それは次のような理由だと考えられる。「補習を必要とするのは一部ではなくなったことと、補習というのが必ずしも効率的ではないということ」⁴⁾と報告されている。補習授業をやめて正規の課程の中に入れざるを得ない状況が生まれてきているのが、現実であろう。2004年文部科学省発表の統計は「補習授業の内容」すなわち、どのような形態で実施され、さらにその内容がどのようなものなのか、どれを「補習授業」と呼んでいるのかが明確ではない。一番問題なのは正規の授業との内容差がどの程度なのか明確ではないことである。そのため今回の調査は今後日本の多くの大学で実施されるであろう「リメディアル教育」の指針とはなりにくい。

2. アメリカのリメディアル教育

(1) The No Child Left Behind Act of 2001 と High-School Exit Exams

アメリカの公立の教育は K-12といわれ、幼稚園 (Kindergarten) から12年生までがこの中に入っていて、K-12以降は高校時代の成績 GPA (Grade Point Average) や SAT (Scholastic Aptitude Assessment) 等によって大学に入学する。しかし高校卒業、大学入学に関して以前と異なる状況が生まれている。1つは2001年の The No Child Left Behind (NCLB) Act であり、もう一方の変化は High-School Exit Exams の存在である。

① The NCLB Act

アメリカの公立学校間の教育活動やその成果・教育課程の大きな溝を埋めるため (Closing the Achievement Gap in America's Public Schools), すべての州に次のような試験を義務づけている。

2005～2006年までに「読むこと (reading)」と「数学」について3年生から8年生に実施し、さらに10年生から12年生の間に少なくとも1回実施しなくてはならない。次に2007～2008年までに小学校・中学校・高校で少なくとも1回は「理科」のテストをしなくてはならない。

しかしこの試験は直接高校卒業と結びついているわけではない。

② High-School Exit Exams

大学入学後授業についていけない学生の増加に伴い、「高校卒業認定試験」というべき内容を実施始めている。2003年の Center on Education Policy の調査では以下のような結果が発表されている。

・この試験を必修としている州 (19州)

Alabama, Florida, Georgia, Indiana, Louisiana, Maryland, Massachusetts, Minnesota, Mississippi, Nevada, New Jersey, New Mexico, New York, North Carolina, Ohio, South Carolina, Tennessee, Texas, Virginia

・2008年までに段階的に実施する州（5州）

Alaska, Arizona, California, Utah, Washington

この Exit Exams は州によって実施学年・実施科目が異なるが、「数学」「英語」は実施州ではすべて科目として入っており、州によってはそれに「理科」と「社会科」を加えているところがある。また試験に落第した学生についてはすべての州が「再受験」を認めていて、ミネソタ州では11回の挑戦を認めている。

1回の挑戦で65～85%が合格をしているが、黒人のグループやヒスパニック、経済的に貧しいグループ、障害を持つグループ、英語の学力の不足しているグループが点数的に低く、統計的には有意差が認められる。

(2) アメリカ・リメディアル教育の問題点

The NCLB Act と High-School Exit Exams の2つの試験はアメリカの高校教育改革の1例であるが、それだけではなく、以下の postsecondary（高等教育）の問題点解決のための動きと大きく関係がある。

The National Center for Education Statistics (NCES) の1996年の発表によると大学に入学した学生のうち25%以上の学生がリメディアル教育が必要であり、州によっては50%を越えるところもある。NCES の1995年の調査では、以下のような内容が明らかになった。

- (1)リメディアル教育を実施している大学の47%が、過去5年間で必要としている学生の割合は変わらず、39%が増えていて、14%が減っていると答えている。
- (2)60%の大学が入学時に試験を実施し、リメディアル教育が必要な学生を決定している。
- (3)この調査により次の検討課題が明らかになった。
 - (a)リメディアル教育が必要な学生をどのように決めるか。
 - (b)なぜ多くの学生が高等教育を受けるに十分な学力を持ち合わせないのか。
 - (c)リメディアル教育を必要とする学生数を減らす為にはどうすればよいのか。
 - (d)このリメディアル教育にかかる費用をだれが負担するのか。

また The Southern Regional Education Board (SREB) はリメディアル教育が必要な学生を次のように分析をしている。

- (1)高校卒業後すぐに大学に入らず、refresher course^④が必要な学生
- (2)在学していた高校が大学に入学するために必要なカリキュラムを設定していない学生

しかしこの分析から、最大の問題点は K-12とよばれる公教育と高等教育の間にある教育内容の差の大きさで、2つの教育機関の調整が必要なことは明らかである。

SREB の調査分析で(1)の問題については、現在の日本の大学が抱える問題とはならないが、(2)については、統一カリキュラムで高校が授業を展開している日本では、問題の本質が多少アメリカとは異なっているが、共通点は見つけられる。それは高校生の科目選択の自由度（高校での履修の多

様化)が広がり、また受験科目の減少で、たとえば医学部入学生の中に「生物」を受験科目にしない学生が多く存在し、入学後の教育に問題が生ずる場合がある、という例である。この(2)に関して、日本の現実に即して表現すれば「選択の広がり(履修の多様化)・受験科目の減少」「高校の授業レベル」と「学生の習熟度」の問題である、といえる。

3. リメディアル教育の実践

本稿では学力低下の問題を「学習者の習熟度」の問題と捉え、リメディアル教育を以下のように実施する。

- ・習熟度クラス編成により、習熟度の低い学習者に対して、正規の授業内にリメディアル教育を設定する。

(1) 研究目的

self-monitoring を含むメタ認知ストラテジーの使用は、学習を効果的に進める重要な要素である。このメタ認知活動を「目に見える」形にしたのが「ポートフォリオ学習」である。佐藤・山名・中川(2004)の結果から「音声と映像が一体化したマルチメディア教材を使用し、その学習を相互補完する方法として、学習者自身の学習を自分で確認させるために、ポートフォリオを作成させたところ、学習者の自律に向けての変容が見られた」という結果を得た。今回は、リメディアル教育の中で、タスク活動を中心に設定した学習方法を取り、その活動の中でポートフォリオ学習の取り組みを学習者がどのように捉えているか、またコンピュータを使用しないで、ポートフォリオ学習がどのような学習効果をもたらすかを明らかにする。

(2) 方法

①被験者の決定

関東地方にある4年制大学(英語を専門としない1学部2学科の文系大学)の2004年度に実施した新入生対象の英検プレイスメントの結果は以下の通りである(表1)。

被験者の抽出方法は、同じ学科の学生を成績順に並べ、上位群1グループ、その他のグループを2つ(等質)に分け(3グループともできるだけ同数とする)、下位グループの2つのうちの1つを今回の調査対象とする。集団の英語力は、英検相当級でみると4級4名、4級未満19名である。

②調査方法

Horwits(1987)のBALLI(Beliefs About Language Learning Inventory)を基に日本人学習者向

表1 英語能力判断テスト(c)(財団法人日本英語検定協会)集計結果

相当級	人数
準2級	1
3級	21
4級	61
4級未満	91
合計	176

きにアンケート「言語学習ストラテジー調査」（資料1）を作成し、プレ調査（実施4月上旬）・ポスト調査（実施7月下旬）を実施し、その結果を量的に分析する。学習効果を明らかにするため、文法を中心とした問題（資料2）をプレ・ポストテストとして実施し、基本的な文法の定着率を見る。さらに被験者の作成したポートフォリオに書かれた感想を分析することにより、質的な結果を得る。

③教材

使用テキスト：*Advantage Get Ready!* (Macmillan Language House)

文法項目の選択：Be 動詞・一般動詞の疑問文、否定文

代名詞（主格，所有格，目的格）

時制（現在形），命令文（肯定，否定）

助動詞（can）

④指導方法と指導期間

(a)必要な単語のインプット（意味とスペリングの確認）

(b)指導文法項目の入った対話文の練習と暗唱（対話文の内容の確認）

(c)上記対話文をモデル文として，新しい対話文の作成と発表

(d)インタビューゲームを中心としたタスク活動

(e)モデル文を参考にして自分の意見の作成

以上の活動はすべて各自のノートに書き，ポートフォリオとして作成する。特に(e)に関しては作成の後，教員に提出する。教員は添削をし，次回の授業には返却をし，学習者はその訂正箇所についてもう一度書き直す。

指導期間は週2回（90分×2），合計28コマである。

4. 結果とその考察

(1) 言語学習ストラテジー調査結果

以下の表（表2）はプレ・ポスト調査の結果（質問41番から45番はポスト調査のみの質問である）の平均値を出し，プレ・ポスト間のt検定（両側検定）をし，出現確率p値をまとめたものである。

①集団の特徴

プレ調査の結果から，平均値が3以上（4段階中）の項目を抜き出し，この学習集団の特徴を示す。

- ・英語は難しい言語だ。
- ・英語を正しい発音で話すことは大切だ。
- ・たとえ自分のやり方とは違っていても先生のアドバイスに従う。
- ・指導者がいないと，英語の学習はできない。
- ・英語の学習で最も重要なのは，単語・熟語を覚えることである。
- ・何度も繰り返し練習するのは大切である。

表2 言語学習ストラテジー調査結果

番号	プレ	ポスト	p 値	番号	プレ	ポスト	p 値	番号	プレ	ポスト	p 値
1)	2.95	3.14	0.38	16)	1.48	1.61	0.49	31)	3.19	3.09	0.66
2)	2.05	2.30	0.33	17)	3.00	2.96	0.87	32)	2.71	2.30	0.12
3)	3.14	2.96	0.48	18)	3.10	2.78	0.27	33)	3.29	3.48	0.40
4)	2.29	2.61	0.28	19)	3.19	2.96	0.37	34)	3.10	2.87	0.41
5)	2.10	2.30	0.42	20)	3.62	3.57	0.76	35)	3.62	3.30	0.21
6)	1.95	2.09	0.42	21)	2.81	2.83	0.95	36)	2.62	2.96	0.23
7)	3.48	3.57	0.62	22)	2.57	2.78	0.39	37)	2.24	2.35	0.63
8)	2.62	2.87	0.27	23)	1.71	1.70	0.93	38)	2.67	2.48	0.48
9)	2.76	2.87	0.68	24)	2.33	2.65	0.25	39)	1.95	2.04	0.65
10)	2.05	1.91	0.58	25)	2.19	2.61	0.19	40)	2.62	2.57	0.81
11)	1.81	2.09	0.16	26)	2.67	3.61	<0.01	41)	—	3.43	—
12)	2.00	2.00	1.00	27)	2.86	2.83	0.9	42)	—	3.26	—
13)	2.62	2.26	0.18	28)	2.76	2.57	0.46	43)	—	3.26	—
14)	1.95	2.17	0.32	29)	2.48	2.48	0.99	44)	—	3.52	—
15)	2.24	2.52	0.28	30)	2.90	2.78	0.63	45)	—	3.43	—

- ・英語ができれば良い仕事のチャンスがある。
- ・私は英語が上手に話せるようになりたい。
- ・英語学習は難しい。

この集団の特徴を佐藤（2004）の2003年度調査結果より、下位群学習者の特徴と比較をすると、2つの項目（英語は難しい言語だ。英語学習は難しい。）が入っていることである。中学校・高校での英語学習に困難を感じている学習集団であり、その傾向は昨年度より強くなっていると言える。

学習方法に関しては「正しい発音」「単語・熟語の暗記」「練習の大切さ」を理解し、学習ストラテジーは獲得していると理解できる。しかし学習の自律という点に関しては「指導者の必要」を意識し、依存が見られ、また自分の将来を考えると「英語ができること」に対する期待感（仕事、話せるようになりたい）は強く持っている、と分析できる。

②調査結果の考察

昨年度、佐藤（2004）の調査結果は以下の5項目について有意傾向・有意差ありの結果が出た。

- ・数学や理科が得意な人は英語の学習は得意ではない。（差：-0.8 p=0.06）
- ・授業を管理するのは、先生である。（差：-0.4 p=0.08）
- ・外国語を学ぶということは他の学問を学ぶこととは異なる。（差：1.2 p=0.03）
- ・外国語ができる人は頭が良い。（差：-1 p=0.02）
- ・授業中の活動は、クラスがみな同じ活動をする方が良い。（差：0.9 p=0.04）

ここでは、学習者は「学習の自律」に向かい、さらに「英語学習に対する自信」さえ見られた。しかし今年度の調査では有意差が認められたのは1項目「カセットテープやCDを使って練習するのは大切である。」のみである。上記3. リメディアル教育の実践 (2) ④指導方法で明らかのように、今回の指導方法は学習者が中学校・高校で受けてきた方法と差が見えにくい点にある。しかし、今回の指導方法の特徴は、「単語・熟語のインプット」を含めすべて「音声」を通して行い、その活

動をすべて「文字化」する活動（ポートフォリオ学習）を設定しているところにある。昨年度のような PC と CD-ROM を使った目新しさは学習者にとってないが、英語学習にとって音声の大切さは認識できたといえる。

また授業評価に関する項目（ポスト調査項目番号41～45）については、すべて3以上の数値で、学習者としては「熱心に、集中して授業に取り組み、新しい知識を得られ」、指導者に対しては「よく準備をして、説明はわかりやすい」という評価をしている。

(2) 基礎学習調査の結果

調査内容は(1) Be 動詞と一般動詞の疑問文・否定文 (2)時制は現在形とし、プレ・ポスト調査を行い、項目毎の平均値をt検定し（両側検定）、p 値をまとめたものが表3である。

①学習集団の傾向

プレ調査結果から正答率50%以下の項目を抽出する。

2.2（一般動詞・3人称単数・否定文）

4.3（一般動詞・3人称複数・疑問文）

4.4（一般動詞・3人称単数・否定文）

4.5（一般動詞・1人称複数・否定文）

4.6（一般動詞・3人称単数・否定文）

4.7（一般動詞・1人称単数・疑問文）

学力調査の内容は、Be 動詞に関するもの9題、一般動詞に関するもの15題であり、一般動詞に関する項目が多いことは事実であるが、この学習集団の特徴として、一般動詞、特に疑問文・否定文に関して習熟が不十分である、ということがいえる。さらに「人称」という概念の理解が不足していることは明らかである。

②学力調査結果の考察

プレテストで正答率が50%を切った5項目については2.2 (0.38→0.52), 4.3 (0.1→0.17), 4.4 (0.43→0.61), 4.5 (0.43→0.52), 4.6 (0.43→0.43) 4.7 (0.43→0.74) とポストテストでは4.6以外はすべて正答率は上昇しているが、有意差が認められるのは4.7だけである。これは、指導過程の中で最も困難を感じたのは「人称の概念」であったことと無関係ではない。それはポストテストでも正

表3 基礎学力調査結果

番号	プレ	ポスト	p 値	番号	プレ	ポスト	p 値	番号	プレ	ポスト	p 値
1.1	0.81	1	0.03	3.4	0.71	0.74	0.86	5.1	0.81	0.87	0.6
1.2	0.71	0.91	0.09	4.1	0.9	1	0.14	5.2	0.76	0.91	0.18
1.3	0.71	0.96	0.03	4.2	0.95	1	0.3	5.3	0.57	0.48	0.55
2.1	0.76	0.91	0.18	4.3	0.1	0.17	0.46	5.4	0.71	0.61	0.47
2.2	0.38	0.52	0.36	4.4	0.43	0.61	0.24	6.1	0.86	0.91	0.57
3.1	0.81	0.96	0.13	4.5	0.43	0.52	0.55	6.2	0.81	0.91	0.33
3.2	0.71	0.87	0.21	4.6	0.43	0.43	0.97	6.3	0.95	0.96	0.95
3.3	0.67	0.7	0.84	4.7	0.43	0.74	0.04	6.4	0.86	0.96	0.26

答率50%を切った項目4.3（一般動詞・3人称複数・疑問文）5.3（Be 動詞・3人称単数・疑問文）からも明らかである。

今回、ポストテストで学習者が全員理解した項目は、1.1（Be 動詞・1人称単数・否定文）、4.1（一般動詞・3人称単数・疑問文）、4.2（一般動詞・2人称単数・疑問文）である。また学習効果が上がった（有意差あり）項目は1.1（Be 動詞・1人称単数・否定文）、1.2（Be 動詞・2人称単数・否定文）、1.3（Be 動詞・3人称単数・否定文）、4.7（一般動詞・1人称単数・否定文）である。

(3) ポートフォリオ作成

佐藤・山名・中川（2004）は PC とポートフォリオ学習が学習の自律を促進する有効な指導法であると結論づけた。しかし基礎学力の定着に関しては必ずしも成果が上がったわけではなく、今後の問題として「口頭練習」「筆記による練習」の必要性をあげている。今回実施した指導方法では、学習した内容をすべてポートフォリオとして学習者に記録をとるように指導をした。学習者はポートフォリオ作成に関しては次のような感想を書いている。（学習者には「ポートフォリオ」という言葉は使用していない。）

- ・自分がわかっている部分と理解していないところがはっきりした。
- ・復習がしやすい。
- ・こんなにノートに英語を書いたことがないが、自分のわからないところがはっきりした。
- ・ノートで確認ができる。
- ・書いて覚える大切さ、復習の大切さを理解した。
- ・ノートに英文を書いていくうちに、英語を見ただけで内容が理解できるようになった。
- ・英語を書くという習慣がついた。
- ・書くことが、覚えて、読めるにつながるとは思わなかった。
- ・ノートに書いていると「勉強をしている」という感じがする。
- ・理解したことを自分でまとめる習慣がつき、覚えるという方法がわかった。
- ・ノートに書く「間違い直し」で、いつも同じ間違いをしていることに気がついた。

この感想文でも明らかなように、学習者は self-monitoring をしながら学習を進めていることがわかる。今回ポートフォリオという言葉を使って説明はしていないが、学習者は自分の言葉で、この学習過程を説明し、さらに自分の学習過程でおこなう「頭の中の活動」すなわちメタ認知ストラテジーを使って、学習効果を上げようとしている。

5. 結論と今後の課題

今回の調査で明らかになったのは以下の5点である。

- (1)タスク活動を中心としたポートフォリオ学習は学習の自律に関しては十分に達成できない。
- (2)学習者はポートフォリオ作成により、self-monitoring を自主的に始める。
- (3)ポートフォリオ作成過程で学習者は学習ストラテジーを獲得している。
- (4)書く作業は学習者に達成感を与える。

- (5) Be 動詞・一般動詞の使い分けを指導する際に、学習者の人称に関する理解を確認する必要がある。

この中で、来年度リメディアル教育を実施する際に特に留意しなくてはならないことは(5)に関する指導である。

今回の学習集団では、Be 動詞・一般動詞の使い分けの指導の際、「口頭練習」→「定着のための確認作業」という手順で指導をしたが、途中学習者の理解に問題が見られたため、「1 人称・2 人称・3 人称」という文法用語を使って説明を試みた。しかしこの概念が理解できない学習者の存在に気がついた。このことは口頭練習時に、理解して substitution drill（置換練習）をしたり、発話をしていたのではなく、「オウムがえし」で言っていたにすぎなかったことが明らかになった。来年度以降のリメディアル教育は、最も基本的な人称代名詞の学習から出発しなくてはならない。これは、(1)から(4)までのポートフォリオ学習の効果をさらに上げるためには必要な条件となりうる。

（さとう・としこ 産業情報学科）

（注）

- (1)『ゆとり教育』の即時中止を求める国民会議（京都大学・西村和雄 他）
(2)『教育指標の国際比較（2002年版）』文部科学省発表より（2002年2月21日中央教育審議会答申）

①全日制高校への進学率

日本－94.0%（2001年）
米国－88.6%（1998年）
英国－71.2%（1999年）
フランス－87.7%（1998年）
ドイツ－82.5%（1998年）

②高等教育機関（大学院，大学，短大，専門学校）への進学率

日本－49.3%（2001年）
米国－45.9%（1998年）
英国－58.4%（1999年）
フランス－43.0%（1998年）
ドイツ－30.3%（1998年）

③人口1000人あたりの高等教育機関の在学者

日本－23.7人（2001年）
米国－31.7人（1998年）
英国－21.2人（1999年）
フランス－35.6人（1998年）
ドイツ－22.0人（1998年）

- (3)高等教育の就学率が15%までの段階を「エリート」、15%から50%までを「マス」、50%を超える

と「ユニバーサル」と名付けている。

(4)初等中等教育と高等教育との接続の改善に関する小委員会（第2回）議事録（1999年1月19日）

(5) a training course in which people improve their knowledge or skills and learn about new developments relating to the job that they do (Collins Cobuild English Language Dictionary)

資料1

言語学習ストラテジー調査

・あなたの考えを聞きます。

1—まったく思わない 2—あまり思わない 3—そう思うことがある 4—その通りです

- | | |
|---|------------------|
| (1) 外国語を学ぶのは、大人より子供の方が簡単である。 | 1----2----3----4 |
| (2) 外国語を学ぶのに特別な才能を持っている人がいる。 | 1----2----3----4 |
| (3) 英語は難しい言語だ。 | 1----2----3----4 |
| (4) 英語の背景にある文化について学びたい。 | 1----2----3----4 |
| (5) 将来英語がうまく話せるようになると思う。 | 1----2----3----4 |
| (6) 日本人は英語を学ぶのが上手だ。 | 1----2----3----4 |
| (7) 英語を正しい発音で話すことは大切だ。 | 1----2----3----4 |
| (8) 英語を話すのには英語圏の文化を知る必要がある。 | 1----2----3----4 |
| (9) 最も効果的な学習方法は先生がよく知っている。 | 1----2----3----4 |
| (10) 宿題は必要である。 | 1----2----3----4 |
| (11) 効果的な授業のためには授業中日本語を使わない方がよい。 | 1----2----3----4 |
| (12) 数学や理科が得意な人は英語の学習は得意ではない。 | 1----2----3----4 |
| (13) 英語の勉強はアメリカやイギリスなどで勉強するのがよい。 | 1----2----3----4 |
| (14) 英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる。 | 1----2----3----4 |
| (15) 自分達でその日の学習内容を決めるのは、効果的ではない。 | 1----2----3----4 |
| (16) 私は英語学習に適した能力を持っている。 | 1----2----3----4 |
| (17) たとえ自分のやり方とは違っていても先生のアドバイスに従う。 | 1----2----3----4 |
| (18) 指導者がいないと、英語の学習はできない。 | 1----2----3----4 |
| (19) 英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである。 | 1----2----3----4 |
| (20) 何度も繰り返し練習するのは大切である。 | 1----2----3----4 |
| (21) 授業を管理するのは、先生である。 | 1----2----3----4 |
| (22) 英語の学習で最も重要なのは、文法である。 | 1----2----3----4 |
| (23) 私が英語学習で進歩がなかったら、先生に責任がある。 | 1----2----3----4 |
| (24) 学生の評価は先生によってされるべきである。 | 1----2----3----4 |
| (25) 英語は、読んだり、聞いたりするよりも、話すことの方が簡単である。 | 1----2----3----4 |
| (26) カセットテープやCDを使って練習するのは大切である。 | 1----2----3----4 |
| (27) 外国語を学ぶと言うことは他の学問を学ぶこととは異なる。 | 1----2----3----4 |
| (28) 英語学習で最も重要なのは、日本語から英文に翻訳する仕方を学習することである。 | 1----2----3----4 |
| (29) 教科書がないと英語は勉強できない。 | 1----2----3----4 |
| (30) 英語を学ぶときは、外国人に習うのが一番良い。 | 1----2----3----4 |
| (31) 英語ができれば良い仕事のチャンスがある。 | 1----2----3----4 |
| (32) 外国語ができる人は頭が良い。 | 1----2----3----4 |
| (33) 私は英語が上手に話せるようになりたい。 | 1----2----3----4 |
| (34) 私は外国人と友達になりたい。 | 1----2----3----4 |
| (35) 英語学習は難しい。 | 1----2----3----4 |
| (36) 誰でも英語は話せるようになる。 | 1----2----3----4 |
| (37) 日本人の先生より、外国人に英語は習いたい。 | 1----2----3----4 |

- | | |
|--|------------------|
| (38) 英語は話したり聞いたりするより、読んだり書いたりする方がやさしい。 | 1----2----3----4 |
| (39) 日本人同士で、英語で会話をするのは無駄だ。 | 1----2----3----4 |
| (40) 授業中の活動は、クラスがみな同じ活動をする方が良い。
(ポストのみ) | 1----2----3----4 |
| (41) この授業に熱心に取り組んだ。 | 1----2----3----4 |
| (42) この授業に集中した(私語などしない)。 | 1----2----3----4 |
| (43) この授業はよく準備されていた。 | 1----2----3----4 |
| (44) 教員の説明はわかりやすかった。 | 1----2----3----4 |
| (45) この授業で新しい知識を多く得ることができた。 | 1----2----3----4 |

資料 2

基礎学力調査

1. 次の文を「～ではありません」という文に変えてください。

(1) I am a student.

→ I am _____ a student.

(2) You are from America.

→ You are _____ from America.

(3) Eriko is my friend.

→ Eriko is _____ my friend.

2. 次の文を「～しません」という文に変えてください。

(1) I like music.

→ I _____ like music.

(2) Yumi plays tennis.

→ Yumi _____ play tennis.

3. 次の文を「～ですか」という文に変えてください。

(1) You are an English teacher.

→ _____ you an English teacher?

(2) He is a very good boy.

→ _____ he a very good boy?

(3) You have a dog.

→ _____ you have a dog?

(4) You eat sushi.

→ _____ you eat sushi?

4. () 内の語を選んで、正しい文にしましょう。

(1) (Do, Does) he like natto?

(2) (Do, Does) you like natto?

(3) (Do, Does) they like natto?

(4) Yutaka (don't, doesn't) play soccer.

(5) We (don't, doesn't) play soccer.

(6) My brother (don't, doesn't) play soccer.

(7) (Do, Does) I have homework?

5. () 内の語を選んで、正しい文にしましょう。

(1) (Do, Are) you play the piano?

(2) (Do, Are) you a music teacher?

(3) (Does, Are, Is) Tom American?

(4) (Do, Does, Are, Is) she study English?

6. 下の疑問文に対する答えを選びましょう。

- (1) Are you a tennis player? ()
(2) Do you like music? ()
(3) Is Ken your friend? ()
(4) Does Tom play baseball? ()
ア Yes, he is. イ No, I am not.
ウ Yes, he does. エ No, I don't.

参考文献

- Charles, M. 1990. "Responding to problems in written English using a student self-monitoring technique" *ELT Journal* 44/4 286-293 Oxford University Press
中央教育審議会答申 2002. 「新しい時代における教養教育の在り方について」
Horwitz, E. K. 1987. "Surveying Student Beliefs About Language Learning" *Learner Strategies in Language Learning* Prentice Hall.
廣森友人 2004. 「self-monitoringを取り入れて」『英語教育』10月号 24-26 大修館書店.
板垣信哉 2003. 「明示的文法知識と暗示的文法知識の実証的研究」『宮城教育大学外国語研究論集』第3号 45-56
峯石緑 2002. 『大学教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究』溪水社.
National Education Association: <http://www.nea.org/esea/>
佐藤敏子 2004. 「自律した学習者を目指して」『動機づけを促す評価方法の研究第1次報告書』文教大学・英語動機づけ研究会.
佐藤敏子・山名豊美・中川武 2004, 「ポートフォリオ学習における学習者の変容」『つくば国際大学研究紀要』vol. 10, 31-48
Trow, M (天野郁夫・喜多村和之訳) 『高学歴社会の大学』1976. 東京大学出版社.
United States House of Representatives: <http://edworkforce.house.gov/>

* この論文は、16年度学術研究振興資金採択研究課題「自律した学習者の育成—CALLを補完するポートフォリオ学習—」の調査をもとに書いたものである。

Remedial Education — The effectiveness of Portfolio-Based Language Learning —

Toshiko Sato

According to a 2004 study by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology about 59% of universities and colleges in Japan offered remedial courses in 2002. An issue that leads higher remediation rates is the disjuncture between high schools towards to a flexible compulsory education system and universities or colleges.

In earlier discussion I report the trends in postsecondary remedial education in the United States. Briefly the argument is as follows:

- (1) How do states determine which students need remediation?
- (2) Why are so many students not prepared for postsecondary education?
- (3) How do states reduce the amount of remediation that students require when entering postsecondary institutions?
- (4) Who pays for remediation?

In the second discussion the effectiveness of portfolio-based language learning is checked. It is concluded:

- (1) Portfolio-based language learning with task-based activities is not enough helpful to promote learners' autonomy.
- (2) Students use self-monitoring technique when making their portfolios.
- (3) The advantage of using self-monitoring technique is that students gain their learning strategy by using the technique.
- (4) The writing task, or making portfolios makes learners feel fulfilled.
- (5) The concept of personal pronouns is crucial for mastering English structures.

Key Word: remedial, remediation, portfolio, autonomy, self-monitoring